



# パラリンピックの 「パラ」ってなあに？



## ルーツ

1942年7月29日、第二次世界大戦によって二大会が中止になったのち、12年ぶりに開かれたロンドンオリンピック開会式。そしてちょうど同日、ロンドン郊外、35マイル離れたストークマンデビル病院では16人の車いす選手の出場でアーチェリー大会が開かれた。障害者スポーツの可能性に着目したルートヴィヒ・グッドマン博士が企画した、第1回ストークマンデビル競技大会。パラリンピックのルーツとされる大会である。

その後毎年競技大会は開催され、5回目を迎えた1952年にはオランダの戦傷軍人が参加し、初めて国際大会となった。

そして節目となる1960年、ストークマンデビル競技大会はイギリスを離れイタリアのローマで開かれた。夏季オリンピックが開催された都市で、オリンピック開催後に開くという形はこれが最初だった。国際パラリンピック委員会が設立されたのち、この大会を第1回パラリンピックと認定された。（「1964年の東京パラリンピック」佐藤次郎著 紀伊国屋書店刊参照）

## 「パラ」とは

パラリンピックという言葉を使い始めた当初は、車いすの選手のための競技大会だったため、= Paraplegia（下半身まひ者）のOlympic = 「Paralympic」という意味で使われていたが、その後、その他の身体障害者も参加するようになり、大会の意味合いが変わってきたため、= Paralle（もう一つの） + Olympicと解釈することになった。（パラリンピック大百科 清水書院刊参照）

## 僕らにスポーツ、僕らもスポーツ ～障害者におくる～

綿祐二／編著 佐藤充宏／著 ベースボール・マガジン社 1997年

障害者がスポーツをするということは、自分への挑戦です。使える身体の部分を総動員して、身体を動かす喜びを体験できます。そして、そのチャレンジをサポートするために私たちは何をすればよいのでしょうか。

障害者が障害者でなくなるちょっとした工夫や、生涯スポーツとして障害者が実際に楽しんでいるスポーツを紹介しています。

## こんな夜更けにバナナかよ ～筋ジス・鹿野靖明とボランティアたち～

渡辺一史／著 北海道新聞社 2003年

筋ジストロフィーで人工呼吸器をつけながらも、素直に夢や欲望に生きた重度身体障害者と、その意思を尊重するため24時間体制で支えたボランティアたちの奮闘を描いた実際にあったお話。2018年には映画化されました。

## 1964年の東京パラリンピック ～すべての原点となった大会～

佐藤次郎／著 紀伊國屋書店 2020年

イギリスのその施設では脊髄損傷で車いす生活を余儀なくされている患者の76.6%が退院し家庭や公共の施設で自立した生活をし、うち57.2%は健常者と同じ終日勤務についている。日本ではほとんどの脊髄損傷患者は病院で寝たきりの生活を送っているのに。

日本の障害者スポーツを、そして現在のパラリンピックの原点ともいえる1964年東京パラリンピックの開催に尽力した人たちと、実際にパラリンピックに選手として参加した障害者の心の変化を描いた一冊。

## パラリンピックからの贈りもの

平山讓／著 PHP研究所 2012年

「失ったものを数えるな、残されたものを最大限に活かせ」

絶望の淵からスポーツと出会い、パラリンピックに希望と自身の可能性に挑戦した障害者たちを描いたノンフィクション作品。何のために生きるのか。あなたはどうか答えますか。どうか答えを見出しますか。

## 障害のある子の「親なきあと」

渡部伸／著 主婦の友社 2018年

私がいなくなったら、障害を抱えるこの子はどうなるのだろうと不安な気持ちになっている方は多いと思います。お金のこと、ケアやサポートのことなど、不安が少しでも解消されるような社会の仕組み、方法が書かれています。

今できることを知り、楽しい毎日を過ごせるように願う一冊です。

令和3年7月

編集・発行：さいたま市立与野図書館 さいたま市中央区下落合5-11-11